

繭作りを止めた蚕

体が透明さを増し

小首を傾げるように動きが緩慢になつてきた蚕が

本能と言う内部の衝動で糸を吐き出し始める

既に薄い膜となつた織物の向うに

外の光が乳白色の微粒子となつて

壁と自分の体との隙間を埋めている

この仕事に取り掛かる前に

自分に言い聞かせるように呟いた

一つの赤い決意

繭作りは俺の必然かと

蝶に化身し花々へと旅立つ前の化粧部屋を創る事が

唯一俺に課せられた仕事なのかと

時を超え時間を超えて蓄えた体中の詰め物を
すべて吐き出して創るこの繭が

一生の記念碑だとするならば

それを拒絶してみたらどうなるのだろう

自分は醜い長虫のまま干からびて行くのだろうか

長い長い瞑想の後に

蚕は糸を吐き出す口を吐き出した糸で

雁字搦めに縛り封じてしまった

一瞬出来かかった繭は身震いして青く縮んだ

細い緑色の血管が鬱血して盛り上がり

繭は静かに死んでいった

蚕はここで初めて生を知る